

進路選択につながる日本語力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 麻里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026308

進路選択につながる日本語力

袴 田 麻 里

【要 旨】

日本政府の留学生の日本定着促進政策により、日本での就職を希望する外国人留学生は増加傾向にある。日本企業に就職し活躍するには、職種にかかわらず、高い日本語力が強力なツールとなる。しかし、実際には「N1 合格」「ビジネス日本語」などが挙げられ、具体的にでないことが多い。「業務上必要な言葉」「説明力」「敬語」「議事録作成」が重要であるという過去の調査に基づき、静岡大学の学部留学生対象の日本語科目「日本語V」で、日本での就職を意識し、語彙や表現の増加、運用力の向上を目標に、企業人との交流も教室活動に取り入れた授業を実施した。今後さらに、限られた時間の中で、日本社会への理解を深め、日本語の応用力を高める学習項目や教室活動を工夫したい。

【キーワード】 留学生の就職活動 学外者とのコミュニケーション 既習の学習項目の運用 アクティブラーニング

1. はじめに

文部科学省は、外国人材の日本企業への就職の拡大を目指し、各大学が自治体や産業界と連携し、外国人留学生の国内就職に必要なスキルである「日本語能力」「日本での企業文化等キャリア教育」「中長期インターンシップ」を一体として学ぶ環境を創設する取組を支援し、外国人留学生の卒業後における国内定着を促進することを主目的に、留学生就職促進プログラムを2017年度より実施（最終年度は2021年度）している。

静岡県では、公益財団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムが文部科学省の採択を受けて、日本国内に本拠を持つ企業等への就職を希望する静岡県内で学ぶ外国人留学生のための教育と支援を促進するために、2017年度より「ふじのくに留学生就職促進プログラム（SCDP）」を開始した。このプログラムの推進によって、静岡大学をはじめとする県内大学等に留学している優秀な外国人材の日本国内、とくに静岡県内の企業等への就職の促進を目指す。本稿は、静岡大学情報学部・工学部1～3年生対象に開講される日本語科目での実践を報告し、日本語力の向上と就職への意識付けの試みについて考察する。

2. 留学生の就職と日本語力

2-1. 求められる日本語力

文部科学省があげる「日本語能力」「日本での企業文化等キャリア教育」「中長期インターンシップ」の中で、日本語能力は、他の2つを後ろ支える基本技能である。文部科学省は、教育プログラムの開発実施として、ビジネス日本語教育を明記している。

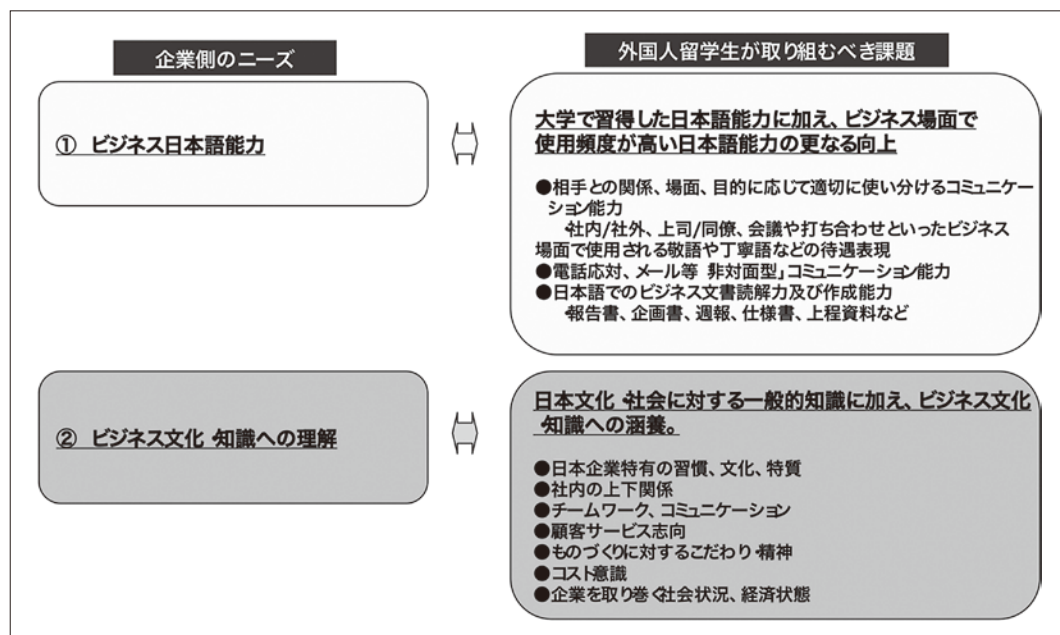
ビジネス現場で必要とされる日本語の運用能力に関する講義の開発実施。本事業においては、最低限、最終学年時の日本語能力試験（JLPT）N1相当の能力獲得は必須とする。（文部科学省（2017）平成29年度留学生就職促進プログラム公募要領 pp.1-2）

周知の通り、N1に合格させることがビジネス日本語教育ではない。N1合格、または日本留学試験日本語科目で350点前後の得点者であっても、学部入学後に教員や日本人学生とのコミュニケーション、講義受講やレポート作成に苦労している。教育を受けるという慣れ親しんだ状況であっても困難であるのだから、未知のビジネス場面で必要とされる日本語運用力を大学に在籍中の留学生が身につけるのは、非常に難しいと思われる。

では、実際にどのような日本語力が求められるのだろうか。

経済産業省（2007）は、外国人留学生が取り組むべき課題として、ビジネス日本語能力を挙げ、「大学で習得した日本語能力に加え、ビジネス場面で使用頻度が高い日本語能力の更なる向上」が必要で（図1）、具体的には、相手との関係、場面、目的に応じて適切に使い分けるコミュニケーション能力、「非対面型」コミュニケーション能力、日本語でのビジネス文書読解力及び作成能力としている。また、日本語能力だけでなく、日本文化・社会に対する一般知識に加えビジネス文化・知識への涵養も求めている。この中には、「日本企業で働く社会人」に求められる「社会人基礎力」の養成も含まれるだろう。

図1：外国人留生活活用に向け取り組むべき課題



（経済産業省（2007）「外国人留学生向けの研修のあり方について」）

ディスコ（2017）は、企業が外国人留学生に求める日本語コミュニケーションレベルを以下のように定義している。

ネイティブ=どのようなビジネス場面でも日本語による十分なコミュニケーション能力

ビジネス上級=幅広いビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力

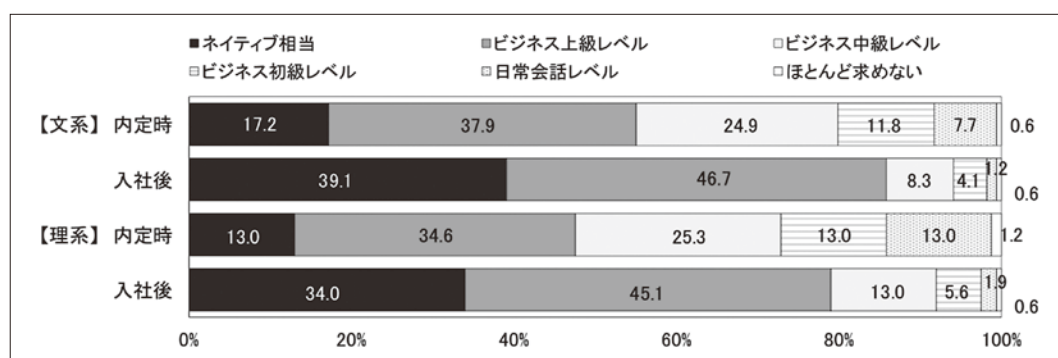
ビジネス中級=限られたビジネス場面で日本語による適切なコミュニケーション能力

ビジネス初級=限られたビジネス場面で日本語によるある程度のコミュニケーション能力

日常会話=限られたビジネス場面で日本語による最低限のコミュニケーション能力

(ディスコ (2017)「外国人留学生／高度人材採用に関する企業調査」)

図2：外国人留学生の内定時・入社後に求める日本語コミュニケーションレベル



(ディスコ (2017) 同上)

図2を見ると、「内定時にビジネス上級レベル以上」を求める企業は文系で55.1%、理系で47.6%である。それが「入社後にビジネス上級レベル以上」は文系85.8%、理系79.1%と大きく増える。採用時すぐに必要というわけではないが、入社後に仕事を進める上でかなり高い水準の日本語力を求める企業が多いことが分かる。つまり、多くの企業が入社後には幅広い場面での日本語による適切なコミュニケーション力を求めており、外国人留学生にとってそのハードルは決して低くないと想像できるが、結局どんな日本語力があればいいか（何ができればいいか）は分からない。

2-2. 日本語科目で就職を扱うメリット

静岡県留学生等交流推進協議会は、2009年に静岡県の大学を卒業後日本企業に就職した元留学生への聞き取り調査を行い、就職してからは「業務上必要な言葉」「説明」「敬語」「議事録作成」が日本語でできなければならないこと、また、留学生は母国とは異なる日本の就職活動と、その意味を正しく理解すること、十分な企業研究、自己分析・自分がしたいことの明確化が必要だという示唆を得た。

日本語力を高めることと、就職と就職活動に対する早期の意識化が、留学生の進路決定により影響を与えるであろうことが推測される。日本語力以外は、日本人学生にとっても重要であるが、日本人学生とは異なるキャリア意識を持ち、日本語能力に不安を抱える留

学生は日本人学生よりも早期に取り組む必要がある。

大学は、2018年度から「キャリアデザイン」を必修化した。マジョリティの日本人が日本企業に就職することを前提とした内容が多い。また、留学生の就職支援も急増しているが、ハウツーもの（日本の就職活動の説明、履歴書の書き方、面接練習、服装など）、実践（企業説明会、面談会、交流会など）がほとんどである。筆者が勤務する浜松キャンパスにおいては、「キャリアデザイン」を情報学部では1年次、工学部では2年次に履修し、社会と職業、キャリア形成などについて考える。受講を通して学生は卒業後について意識を持ち始め、3年次以降スムーズに就職活動を開始できると思われるが、留学生の場合、前提となる「日本での就職」「日本の就職活動」に対する認識不足、加えて日本語力への不安から、日本人と同等の受講効果が期待できない場合があると推測される。

これら留学生特有の課題に取り組むには、留学生だけが履修する日本語科目で扱うのが適切である。どのような内容であっても、自分が意図したことを的確に相手に伝えるには、繰り返し練習する必要がある。就職活動も奨学金応募も、アイデアをまとめるための情報収集とディスカッションは必ずしも日本語である必要はないが、日本語であれば日本社会の情報とともに、語彙や表現を取り込むこともできる。

2-3. アクティブラーニングのメリット

本稿で報告する日本語科目は、アクティブ・ラーニングの手法を用いることにした。アクティブ・ラーニングとは、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく（中央教育審議会 2012）手法である。日本語科目は、静岡大学情報学部・工学部1～3年生対象の開講である。対象となる留学生（2018年11月現在）は67名で、出身国別にはベトナムが42名、インドネシア9名、中国5名、韓国5名、タイ3名、マレーシア2名、台湾1名である。前述したように、留学生は、日本人学生とは異なる就労に対する概念や就職活動の認識を持つが、留学生同士であっても出身国が異なれば当然ながら認識も異なる。指導する教員も知り得ない事柄も多い。授業では、この多様な認識と彼らが持つ母国語の知識も学習資源として、日本語で分かりやすく情報を提供する能力（話す、書く）を向上させることを目的とする。

3. 日本語Vでの実践

3-1. 学部正規生対象の日本語科目

静岡大学では、学部留学生を対象に全学教育科目で7つの留学生科目が開講されている（表1）。いずれも選択科目である。受講は1～3年次と指定されているが、全ての学部で1年生科目、または2年生科目として開講されており、3年生以上の受講者は少ない。

筆者が勤務する浜松キャンパスには工学部と情報学部があり、学部正規生は毎年15～25名ほど入学する。日本語力は日本留学試験の日本語科目で300点以上、またはN1程度であるが、日本人と同等に勉学生活を進めるのは容易ではない。そのため、1年次は、大学生活になれ、大学で学ぶために必要なアカデミック・ジャパニーズを身につけることが目標である。つまり、教員や学生同士を中心とした学内（ホーム）でのコミュニケーション能

力を高める。

大学生活にある程度慣れ、それぞれの学部での勉学が専門科目へと比重を移し始める2年次は、日本語学習への意欲がやや低下するが、インターンシップなど、徐々に学外（アウェー）とのコミュニケーションが必要になってくる。そこで、2年次には実用日本語として、表現すべき内容を把握し、相手と自分との関係を考慮し適切に伝える日本語表現力の習得を目標としている。いずれの科目も具体的な学習内容は担当教員が受講学生の日本語能力を勘案して決定する。

表1：留学生科目

科目名	開 講	内 容
日本語Ⅰ	1年生前期	かなり高度な文法・漢字・語彙を習得する。大学の授業についていく日本語力を身につける（まとめる、意見を述べる）。
日本語Ⅱ	1年生前期	必要な情報を聴き取ったり、大意をつかんだりするための聴解力を身に付ける。レポートを書くための基礎知識や文章表現力を養う（引用、文の基本、段落、文章表現）。
日本語Ⅲ	1年生後期	ニュース、講義などいろいろな分野の情報を音声を通して収集し、理解した内容を文章にまとめる。
日本語Ⅳ	1年生後期	かなり高度な文法・漢字・語彙を習得する。大学の授業についていく日本語力を身につける（まとめる、意見を述べる）。
日本語Ⅴ	2年生前期	実用日本語。表現すべき内容を把握し、相手に明確に伝える日本語表現力を養う。
日本語Ⅵ	2年生後期	実用日本語。表現すべき内容を把握し、相手に明確に伝える日本語表現力を養う。
日本事情	1年生前期	現代の日本社会や日本人の考え方について、自分の経験に絡めて考え、ディスカッションする。

3-2. 日本語Ⅴの概要

筆者は、2018年度前期に日本語Ⅴを担当した。受講者は、情報学部2年生4名（ベトナム2、台湾1、韓国1）、工学部2年生10名（インドネシア3、ベトナム3、中国2、タイ1、マレーシア1）、韓国人交換留学生4名の18名で、日本語力は中上級から上級程度である。学部生の日本滞在歴は1～3年で、すでに進路を決めている1名の交換留学生以外は、卒業後の進路に日本での就職という選択肢を持っていた。

授業の目標は、インターンシップや就職活動などで必要となる、学外の日本人、自分のことを知らない日本人と日本語で適切にコミュニケーションできるようになることとした。ただし、今すぐできるようになることが目標ではなく、受講によって日本語学習意欲を維持し、受講中から受講後1年程度かけて、実生活の中で使えるようになることが目標である。授業内では①仲間内のコミュニケーション方法との違いや語彙、表現の違いを理解こと、②それらが実際にどのように行われているか、どのように使用されているかに気付くこと、③練習して実際に使ってみることを計画した。特に、相手による使い分けや文化的

要素に基づく表現などは知識の整理と場面の確認を徹底した。

授業は、アクティブラーニングの手法を用いた。自分の理解を深め、書いて説明、話して説明する能力を向上させるため、宿題をもとにグループワークやペアワークを多用した。教員は適宜個別に指導し、最後に宿題等で学習状況の確認を行った。

1回の授業時間は90分、全15回の授業内容は、表2の通りである。

表2：日本語Vの授業内容

回	内 容 (●はグループワーク)		宿 題
1	性格の言葉	性格の言葉導入	各性格が分かる言動例
2	性格の言葉	言動例のシェア、検討、修正●	自分の性格発表準備
3	性格の言葉	発表、評価	相手が違う時の依頼文
4	相手による使い分け	1. 依頼文のシェア、検討● 2. 対話から表現聞き取り	CD スクリプトから 表現抜き出し
5	相手による使い分け	1. 対話から表現聞き取り 2. ロールプレイ導入●	ロールプレイ練習
6	相手による使い分け	ロールプレイ披露、検討、修正●	敬語の確認
7	敬語	1. 敬語確認● 2. 対話から表現聞き取り	CD スクリプトから 表現抜き出し
8	敬語	1. 宿題の確認● 2. 敬語の練習問題●	練習問題の確認
9	メール	1. 敬語復習● 2. メールフォーム導入	問い合わせメール作成
10	メール	1. 宿題の検討、修正● 2. 返信メール導入と練習 3. お礼メール導入	インターンシップの 問い合わせメール
11	メール	1. 宿題の検討、修正● 2. お礼メール練習 3. 体の慣用句導入	1. 体の慣用句例文作り 2. 企業HP閲覧、質問
12	慣用句	1. 体の慣用句意味確認、例文確認● 2. 企業とのセッションガイダンス	1. 慣用句の意味確認 2. 企業からの質問に回答
13	慣用句	1. 慣用句の問題● 2. 企業とのセッション役割とグループ	慣用句の問題復習
14	企業とのセッション	セッションの準備●	1. 挨拶メール送付 2. セッション準備
15	企業とのセッション	セッション	1. お礼メール送付 2. アンケート

日本人が使う性格の言葉、表現は多様だが、留学生にとっては「聞いたことはある」程度のものが多い。また、今まで数え切れないほど自己紹介をしてきたが、自分のことを全く知らない人に、文面だけで自分を伝える作業は、学内やアルバイト先、サークル等での自己紹介とはかなり異なる。語彙や表現を正しく理解し紹介に使用することはもちろんだが、文字だけで自分を理解してもらうためには、その性格を表す具体的なエピソードとともに提示すると効果的で、就職活動での自己アピール、奨学金申請や大学院進学のエッセイなどでは、この技能が不可欠である。授業では、語彙、表現の意味確認から始め、自分が書いたエピソードが、意図した通りに認識されるか、なぜ意図と異なる認識となるのかを考え、修正する作業によって、説明する練習を行った。

相手によって違う表現や敬語で扱った学習項目は、入学前にすでに学んでいる項目であるが、これらの多くは使い方があいまいであったり、実生活で支障がないため使わないまま過ごしていることが多い。アルバイトと店長、就活生と面接官のように人間関係を明確にし、場面と組み合わせて類似表現との違いを理解してから、既習表現を組み合わせて産出練習をしたほうが効果的だと考え、今回学習項目として取り上げた。

メールは、受講者もちろんこれまでに日本語で送信、受信した経験があるが、見よう見まねだった学生が多い。メールの基本のフォームを学び、学外とのコミュニケーションの第一歩として、インターンシップ募集への問い合わせを設定してメール作成の練習を行った。

慣用句は、日本語上級者の学部留学生でも知っているものが少ないが、社会人になると耳にしたり使ったりする場面がある。まず、意味を正しく理解し、性格の言葉と同様、今は理解を深めて、半年から1年かけて周囲での使用に気づき、徐々に使えるようになることを目標とした。

15回目は、すべての学習項目を使って実際に学外者とコミュニケーションする機会として、静岡県国際交流協会（以下、SIR）の「留学生就職支援講座—企業の人事担当者に聞く—」と重ねた。今年度は、日星電気株式会社総務部（以下、日星電気）から講師を迎えることとなった。事前に、宿題で日星電気のホームページを閲覧させて質問事項を考え、質問の方法などを授業で検討し練習した。また、SIRを通じて日星電気より留学生への質問「日本へ留学した理由」「日本で就職をしたい理由」「日本の生活、就職、就業において困ること、自国の文化と違うところ」を受け取り、12回目に全員へ回答の準備を課した。今回は受講者が多かったため、日星電気からの質問ごとに受講者18人を6人ずつ3グループに分けた。グループ内で、SIRと日星電気への挨拶メール1名、日星電気への質問2名、日星電気からの質問に対する回答2名、SIRと企業へのお礼メール1名の分担を決め、グループごとに準備することとした。

3-3. 受講者のアンケートより

15回目終了後にアンケートを実施し、意図した日本語学習意欲の維持と就職に対する意識付けが高まったかを調査した（受講者18名中、16名が回答：インドネシア3、ベトナム5、マレーシア1、タイ1、中国1、台湾1、韓国4）。

3-3-1. 学習項目について

もともと日本語力が高い学部生2年生なので、既習の学習項目が多かったが、知っていても理解が浅い、または使えない学習項目も多かった。既習項目だが、改めて学習したことでより理解が深まった、使えるようになったことが明らかになった。

表3：学習項目についての感想（複数回答）

	新しい知識が得られた	知っていたが理解が深まった	知っていたが使えるようになった	知っていたし使えるので勉強する必要はなかった
性格の言葉	10	7	1	1
相手による使い分け	2	13	3	0
敬語	1	10	6	0
メール	9	5	4	0
慣用句	13	2	3	0

特に顕著だったのは、自己紹介で使う性格の言葉である。自己紹介の重要性と、今までとは異なる自己紹介が必要だということに気づいた学生が多かった。適切なエピソードが理解を促すことを実感できたようである。

- ちょっとした性格の違いや、使う場面によって言葉が変わるので、それぞれの場合の使い方が理解できた。(インドネシア、工学部)
- 自分の性格は他人にわかってもらうように説明できるようになった。(ベトナム、情報学部)

相手による使い分けと敬語は、今回学習項目として取り上げたことで、知っているがその使い分けが曖昧だった項目で、何に注意すべきか、どれを使うべきかが整理されたようだ。「相手」が自分とどのような関係なのかを正しく認識し、どの表現を使うべきか、どのような順番で話を進めるべきかに意識を向けられるようになった。

- 知ってはいたがあまり適切に使える自信がなかった表現たちを、この授業で勉強したおかげでちょっとずつ使えるようになった。(韓国、情報学部)
- どんなとき使う、又は使っている敬語はあっているかわからなかったが、具体的な例をいくつか教えてもらったため、これから使えると思う。(タイ、工学部)

メールでは、基本のフォームだけでなく、返信とお礼メールが必要であることを知らなかったようだ。面識がない相手に出す場合、自分を適切に紹介する必要性に思い至らなかった学生も多い。また、ほとんどの留学生は、失礼にならないよう気をつけているが、その気がなくても失礼な印象を与える恐れがある。ウェブサイトでインターンシップの募集を見つけ問い合わせするというタスクで、ある学生が書いた「HPを拝見しましたが、よく分からないので問い合わせさせていただきました」という文が、文法的に正しく敬語を使っているのに不適切な文であると感じ、検討の対象となった。これによって、失礼さは敬

語の不使用から生じるものだけではないことが理解された。

- お礼のメールの大切がわかるようになった。(ベトナム、情報学部)
- 今までメールを何度も書いたが、正しくないことが多い。失礼な内容を送ってしまうこともある。これから就職などに役に立つと思います。(ベトナム、工学部)
- ずっと適当に送っていたが、正しい書き方を教えてくれて、さらに自分に関係があるインターンシップのメールの書き方を教えたため、実際に出してみたことができました。(タイ、工学部)

慣用句は、知識自体がない学生が多く、意味理解にとどまってしまった。しかしながら、学習後に、いくつかを日常生活で耳にしたという報告もあり、知識を得たことが周囲の使用への気づきを促す効果があったと思われる。

- この前聞いたことはない慣用句だから、始めてきて勉強になるがその慣用句の意味を深く理解するまだできない。使えるのも無理だと思う。(中国、工学部)
- 慣用句の数が多すぎて、覚えられない。なので、使うのは少ないが理解が深まって、他人から聞いていれば、意味が分かる。(ベトナム、工学部)
- この授業でさまざまな慣用句を学ぶことができ、ちょっとずつでも使えるようになった。(台湾、情報学部)

企業とのセッションについては、「aよかった」という回答が14名、「bよいこともよくないこともある」という回答が2名であったが、その理由は、日本語学習に関するものと、企業の方との接触に関するものとに分かれた。

[日本語学習について]

- a. 発表の練習ができました。(マレーシア、工学部)
- a. ドキドキでしたが、それを克服して話せるようになった。(ベトナム、工学部)
- a. 勉強した知識をよく使えるかどうかをチェックできた。(ベトナム、工学部)
- b. (担当の) メールを書く練習は出来ました。他のことを全然していない。(インドネシア、工学部)

それまで学んできた学習項目を練習としてではなく運用する機会があったことに対して、好意的な評価だった。企業から必要な情報を得る、企業へ求められた情報を与えるという、最も自然な情報のやり取りを適切に行えるかを学生自身が確認できたことは、学習の振り返りとしても機能したと思われる。授業という枠組みの中であったことが、適度な安心感を与えたのかもしれない。しかしながら、グループ作業としたため、全ての学習項目を試す機会を与えられなかったことについては、工夫が必要であった。

[企業の方との接触について]

- a. 直接会社のほうから就職の情報をもらった。(中国、工学部)
- a. 先に日本の会社について多少理解したほうもこの先に役に立つ。(台湾、情報学部)
- a. 会社の社会人と接触は就職の面接に向かって心の準備のようでした。(ベトナム、情報学部)
- b. 日本で就職する考えがない私には使う機会がない。(韓国、交換留学生)

ほとんどの学生が、日本企業に関心を持ってはいるが、直接話をするのは初めてであっ

たため、日本企業への関心や就職に対する意識が高まったことがうかがえる。学生が日星電気のHPを閲覧し用意した質問は、社内の雰囲気や上下関係、海外拠点や給料・昇給、面接対策、研修、外国人採用についてなど多岐に渡った。企業の方からの回答は、学生の予想とは異なるものも多く、日本の企業の一例を実際に知ることができた。事業内容を知り、インターンシップに行きたいという声も多かった。

また、この授業が今後どのように役立つと思うかという問いには、役立つ、また学んだことが使えるという回答が多く、実社会での実践練習が期待できるが、全く日本で就職する意志のない受講者には役に立たないという印象を与えた可能性がある。

- 性格の言葉、慣用句などはいつでも日本のどこでも使えると思っている。それらを上手に使えば、自信がわいてく。自信を持っていれば、自分の能力が十分発展できるのである。(ベトナム、工学部)
- 就職の時に、卒業論文を発表するときにも使えます。私大学院に進学したいから、ケイゴやメールをドンドン使わないといけなくて、非常に役に立つと思います。(ベトナム、工学部)
- 慣用句とか性格の言葉は日常生活でも役に立つと思うけど、敬語とかはあまり使うことがなさそう。(韓国、交換留学生)

これらの感想から、学習項目は既習のものが多かったが、より理解を深めることができたこと、一部は適切に運用できるようになったことが分かる。また今後も今回の学習項目の周囲での使用に注意を向け、自分でも運用を試みる意欲があることから、学習項目の定着が促されると思われる。就職に対しては、メールや敬語では意識されたが、ほかの項目ではそれほど強く意識はされなかったようだ。しかしながら、最後に企業とのセッションを設定したことで、日本企業への関心や就職に対する意識を高めることができたと思われる。

3-3-2. 授業の形態について

宿題で用意したことをグループで考える、またグループで作業したことを宿題でまとめるという授業の形態について、回答者16名中、「b. グループで他の人に説明するのが、とてもいい練習になった」を11名、「a. 一人で勉強するよりたくさん理解できたし、使い方も分かって、実際に使えるようになった」を7名、「e. 自分で／みんなで考えてから最後に先生が説明するので、自分の理解を確かめられてよかった」を5名が当てはまると回答した(表4、ゴシック体)。「f. グループで話す時間は不要だった」と回答した学生がいないことから、自分の理解を深め、書いて説明、話して説明する能力を向上させるという目的に合致した形態であったと言える。

しかし、一部の受講者は不安、不満を感じたようだ(表4、斜字体)。ベトナムの学生3名が「g. 時々クイズやテストをした方がいい。もっと覚えられる」、ベトナム、中国、タイの学生1名ずつが「j. 最初に先生から説明や例を教えてもらってから話し合う方がいい」、中国と台湾の学生1名ずつが「h. グループのメンバーが誰かによって理解に差が出るので、この方法はよくない」、中国の学生1名が「c. 学生同士で話すと間違いが多かったので、あまり知識や技能が身につかなかった」が当てはまると回答した。彼らは、講義型の学習スタイルを好むようである。静岡大学では、学部 of 講義においてもグループワー

クを取り入れているが、入学前までの学習スタイルとの違いが入学後2年経っても影響を与えている可能性がある。

表4：宿題とグループワークの多用について（複数回答）

a. この方法だと一人で勉強するよりたくさん理解できたし、使い方も分かって、実際に使えるようになった。	7
b. グループで他の人に説明するのが、とてもいい練習になった。	11
c. この方法は好きだが、学生同士で話すとき間違いが多かったため、あまり知識や技能が身につかなかった。	1
d. 宿題を忘れても、他のメンバーが教えてくれるのでよかった。	3
e. 自分で／みんなで考えてから最後に先生が説明するので、自分の理解を確かめられてよかった。	5
f. 先に先生の説明を聞いて一人で勉強した方が理解できるので、グループ話す時間は不要だった。	0
g. 時々クイズやテストをした方がいい。もっと覚えられる。	3
h. グループのメンバーが誰かによって理解に差が出るので、この方法はよくない。	2
i. 宿題を忘れた人が、他のメンバーに教えてもらって楽をしていたから、この方法は好きではない。	0
j. 最初に先生から説明や例を教えてもらってから話し合う方がいい。短い時間で正しく分かるから。	3
k. 友達と話すので眠くならなかった。	3
l. 宿題が大変だった。	0
m. その他	2

4. 進路選択につながる日本語力と今後の課題

日本語科目の履修を通じて、就職への意識付けを行い、日本語の学習意欲を維持、または向上させることを目的に、主として学部2年生を対象とした「日本語V」を行った。アクティブラーニングの手法を用いて、インターンシップや就職活動などで必要となる、学外の日本人、自分のことを知らない日本人と日本語で適切にコミュニケーションできるようになることを目標に、①仲間内のコミュニケーション方法との違いや語彙、表現の違いを理解すること、②それらが実際にどのように行われているか、どのように使用されているかに気付くこと、③練習して実際に使ってみることを計画した。

授業後のアンケートから、①既習の語彙や表現が多いが、その意味や用法の違いや仲間内のコミュニケーション方法との違いを理解することができた、②周囲での使用に気付けるようになった、③15回目に日星電気の会社説明を設定したことで、授業で学んだ項目を実際に使うことができた、ことが分かった。これらは、日本での就職に対する意識を明らかに高めたとと思われる。

低学年を対象に開講される日本語科目において、テーマ設定を卒業後の進路とし、アク

ティブラーニングの手法を用いて各項目を学習することは、就職への意識付けを行い、日本語の学習意欲を維持、または向上させるのに有効であった。また、学外者を学内（ホーム）へ招き、疑似的に学外で（アウェー）のコミュニケーションが練習できた。

特筆すべきは、15回目に設定した日本企業との接触は、留学生にとって有益だっただけでなく、企業にとっても留学生に対する宣伝効果があったのと同時に、普段の留学生を知る機会にもなったことである。今回は留学生採用実績のある企業であったが、留学生採用実績がない企業であれば、接触によって今後留学生採用の検討が期待できる。

新卒一括採用の見直しが検討される中、今後、留学生が自律的に進路を選択する必要性はますます高まると予想される。また、現在は全学的にキャリア教育を低学年から始めるため、学部2年次の留学生に就職を意識させる機会が、必ずしも日本人学生と共に作業を進める前の段階とははなくなる。多くの留学生は日本人学生と同等、またはそれ以上の学力・資質を持っている。キャリア意識を明確にした上で日本人と同じ採用枠でも求職活動ができれば、進路選択の幅を広げられる。大学における日本語教育は、限られた時間の中で、日本社会への理解を深め、日本語の応用力を高める学習項目や教室活動を工夫する必要に迫られている。

経済産業省（2007）「外国人留学生向けの研修のあり方について」

<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3486530/www.meti.go.jp/committee/materials/downloadfiles/g70410b01j.pdf>

静岡県留学生等交流推進協議会（2008）「静岡県における留学生の就職意識と企業の留学生採用意識に関する調査結果」『話っ、輪っ、和っ！2008 報告書』静岡県留学生等交流推進協議会、pp.72-152

静岡県留学生等交流推進協議会（2009）「留学生の日本企業への就職・日本企業での活躍を促すために」『話っ、輪っ、和っ！2009 報告書』静岡県留学生等交流推進協議会、pp.59-148

ディスコ（2017）「外国人留学生／高度外国人材の採用に関する企業調査」

<https://www.disc.co.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/2017kigyuu-gaikoku-report.pdf>

中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へ～」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf

袴田麻里（2012）「留学生の進路の幅を広げるために」『静岡大学国際交流センター紀要』第6号、pp.39-52

Japanese Education for Choices after Graduation

HAKAMATA, Mari

The number of international students who want to get a job in Japan is increasing because of Japanese government policy. It is said that higher Japanese language proficiency, N1 or “business Japanese”, is the powerful tool for job hunting in Japan. Based on the preceding reports, the author planned the Japanese advanced class to build vocabulary and improve performance in Japanese through the active leaning approach for their job hunting in the future. This class was for undergraduate international students and included a guest lecture session from a private company. Japanese classes conducted by the university will be requested to provide even more and various learning contents and classroom activities in order to improve the understanding of Japanese society and practical skills in future.